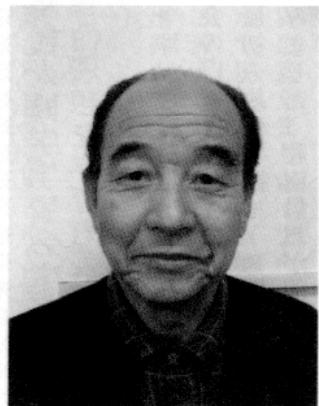


高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740(32)4156自
反
慎
独

白井 則茂



最近不登校、暴力行為、引きこもり、いじめなど殺伐なことが多くなってきて、カウンセラーが学校に常駐したりするなど、いろいろな対策が採られています。私は根本的には「子育て」に解決策を見出すのがいいのではないかと思っています。特に幼少期の子育てが重要だと

いろんな資料や本を涉獵するに、乳幼児期の親子の関わりが、乳幼児の脳の発育と、大きくなつてからの問題行動に深い関係があることを知りました。先にも触れましたが日本ではかつて「3歳児神話」という言葉がよく使われ、「子育てにとつて3歳までが重要なので3歳までは家庭で母親の手で育てないと子どものその後の成長に悪影響を及ぼす」といふもので、その下敷きになつたのは「三つ子の魂百までも」という日本

人の経験則です。そしてそれは脳科学が発達した今日、脳の前頭前野にある眼窩前頭皮質の発達がその後の問題行動と深く関わっていると科学的に証明されています。そしてその脳の発達がその働きによって「臨界期」があるという。眼窩前頭皮質（社会性を育てる）の臨界期は2歳半から3歳で達します。その頃までに母親や周囲の人達に充分に愛されたと認識できれば子どもはその人達の言うことを聞くようになります。

近年、高い学歴を持つた親が多いが、自分本位で行動し、子育てもその延長で乳幼児の動物的本能を無視し得々としている人が多いようです。

藤樹先生の「自反慎独」という教えがありますが、折角、高い知識を身につけた学問なのだから余計に自分に反らなければならない。いたずらに人を責めたたらただその人の短所が見えて、自分の欠点に気がつかない。「慎独」は解りやすく言い換えると昔から言われている「見てござる」、「どんな暗闇でも、誰からも見えない、見ていないと思つても神さんはちゃんと見ておいでだよ」ということです。この教えが一番やさしいようで一番難しいかもしれません。

最近は、私たちの想像を超える事件に驚かされる事が少なくない。例えば、青少年による残酷な事件や良識ある人々と考えられている政治家や警察官、大学教員などによる犯罪などがある。

事件が報じられるとメディアの陳腐な発想は、「どうすれば、このような事件をなくせるか」だ。根本を見直す必要があるという論調は、子供のころからの家庭教育、学校教育、道徳教育、教員研修、社会教育、地域ぐるみの教育、教育改革へと話は広がっていく。しかし、待てよ。徳は、法律で教え込めるものではない。政治が、より良い社会を形成するのに、大きな力を發揮することは確かだ。しかし、その反対に国全体を戦争の惨劇に引きずり込む歴史もあつた。

「まっすぐに生きる」という志は、その人の意思決定によるべきもので、本人が納得して初めて行動に移される。これが「致良知」であろう。徳は、お互いの心の共鳴でしか伝えられないものだ。

私達一人ひとりの生き方を周りの人の生き方に伝えることで、社会は確かに変わっていく。時間はかかるけれども最も近道だ。

ひじりの声

上田藤市郎

「中江藤樹・心のセミナー」

二会場で映画会開催

今年度の「心のセミナー」は、市内の皆さん、とりわけ南北地域（高島・マキノ）の方々に藤樹さんをもつと身近に知つていただきたいと願つて、『近江聖人・中江藤樹』の映画鑑賞会を企画しました。

先ず三月七日（土）の午後に、マキノの土に学ぶ里研修センターで開催しました。あいにくの雨でしたが、会員を含めて四十八名の方が来場されました。

続いて三月八日（土）の午後に、高島公民館アイリッシュパークで開催しました。この日は、会員を含めて五十五名の方が来場されました。

二日間、合わせて百人を超える方々に鑑賞して頂いた『聖人』と称された中江藤樹先生の人となりや考え方、生き方を見事に映し出されていました。改めて、見慣れました。

十数年前に見たことがあるはずですが、忘れてしまつてあるところがたくさんありました。改めて、見慣れました。

た景色に親しみを感じながら、一

面に感動を覚えることができまし

た。

今回参加できなか

った皆様

も、お手元

に『近江聖人・中江藤樹』のDVD

（又はビデオテープ）がありましたら、是非ご覧いただくことをお勧めします。（藤樹会にも残部がありますのでお問い合わせください。）

参加いただきました皆様、本当にあり

りがとうございました。

（事務局）

※※※※※※※※※※※※

藤樹人間学学習会：
藤樹思想を学び考え方実践する

田 中 清 行

今号から約三年半前から始めた本学習会の内容をシリーズで紹介します。

最初の約三年間は『翁問答』に取り組みました。藤樹思想が前期、中期、後期があるといわれている中で、『翁問答』は中期後半の藤樹学形成期に「孝」の思想が確立された時の主著です。

「孝」の思想は、概していえば、天



（太虚、大宇宙）と人（我・他人）が、親子の延長線上にあり、大いなる親子関係で繋がっているという、悠大で他に類をみない温かい思想だと話しました。

三年間かけてじっくり学んだので、理解が深まったのではないでしょか。久保田暁一先生も皆出席で温かく見守つてくださり時々お考えを吐露していました。

十二月から『大学解・通解』に入りました。『大学』を藤樹先生が読み解かれた先生晩年の著書で、西晋一郎先生が通解されています。

一月十四日（水）、安曇川公民館で学習会を行いました。

田松陰は「人は何のために学ぶのか。自分を磨いて、世の中に役立つため学ぶのだ。そのため広く、深く学んで、自分の頭で考え行動することが大事！」と言っています。私たちもそういう志を持つて学び続けましょうと。

二月十一日（水）、安曇川公民館で行いました。

はじめに次のように話しました。内

村鑑三は「楕円形の話」をしていました。真理は円形に非ず楕円形なり。一個の中心の周囲に描かるべきものに非ずして二個の中心の周囲に描かるべきものである。：宗教の真理が、中心を二つ持つ楕円形と見る見方は、自と他とみるだけでなく、それ以上に愛と義

の問題として論じられている。

私たちは、「孝」の思想もまた真理であることを話し合いました。

その上で本文に入り「大学の道は、明徳を明らかにするに在り。民に親しむに在り。至善に止まるに在り」から学び始めました。これは「大学の三綱領」といわれるものです。

三月十一日（水）、ウエストレイクホテル可以登樓で行いました。

今回から副読本として古川治著『中江藤樹』を用いました。

明徳は誰でもが持つてゐる美しい心であるという思想が二千五百年前から現在も続いていることの意味について考えました。

四月八日（水）、安曇川公民館で行いました。

「民に親しむに在り」とは、明徳が天下一切の事物に行き渡ること。そこには慈愛、親愛の心がある。しかし、その親愛の心には「私欲」が混じり入つてゐるので、そういう我執を取り払うことにより、至善（最高善）に至り、そこに止まることができるということ。

これは「良知に致る」ために「五事を正す」と同様のことではないか、と議論しました。

六月からは第一土曜日の午後に行います。皆さまのご参加をお待ちしています。共に学びましょう。

「藤樹紙芝居」の紹介②

(解説)

中江藤樹先生は、「良知（自分の心にもつてゐる美しい心）」にしたがつて行動するよう心掛けて生活していました。また、門人たちにもこの「知行合一」の精神を熱心に説きました。

困つている人を見たら、親切にする

ことは当然だと言えますが、実際にそ

ういう場面に遇つたと、見ず知らずの人には骨をおりたくない」だとか、「めんどうなことには関わりたくない」などの気持ちが出てきます。

一方、助けてあげた人から、感謝されたり、困つている人に親切にできたり、喜びなどを感じたりして、実際には親切にして良かったと思うことが多いものです。このような経験を重ねることで、ごく自然に実践できるようになる

ものです。

この「車

が田におちた」の話は、中江藤

樹先生が、伊予の大洲

から郷里の

小川村に



帰つてから

①今から、四〇〇年ほど前のこと

語り継がれたものです。藤樹書院で門人たちに教えるかたわら、近隣地域へ出かけて村人たちに講釈をしたりして、いたころの話です。病気になつた子ども看病の仕方を近所の村人に、ていねいに教えました。また、ある時は、増水で崩れた小川の石垣の保全について、教えを講じに行くと、すぐに現場へ出向いて土木工法を教えるなど、勞を惜しまず、親切に接したと伝えられています。

藤樹先生のこの生き方は、小川村はもとより、近隣の村人にも大きな感化を与えました。人々は、講釈からだけでなく、良いと分かつていることは、すぐに実行に移す藤樹先生の後ろ姿からも、多くのことを学んだからでしょう。

藤樹先生が見知らぬ馬方を、率先して助けたと伝えられる「車が田におちた」の話は、低年齢の子どもたちにも分かりやすい展開です。会話文を多く使うことで、分かりやすく親しみやすい内容としてとらえてもらうことを願つて、馬方の相棒である馬の「クリ公」にも、会話の仲間入りをしてもらいました。

この紙芝居を見た子どもが、中江藤樹先生の人柄に親しみを感じ、自らも気軽に親切な行いができる、意欲のある子どもに育つことを願つています。

す。
ここは近江の国 小川村、藤樹先生の家の前です。小鳥たちが元気よくチーーーと鳴いています。まぶしい朝のお日さまが、きらきらとかがやいています。きのうからふりつづいた雨が、ようやくやみました。藤樹先生が、家から出てきました。

藤樹先生 「おう、いい天気になつて良かつたなあ。そこらじゅうが水たまりになつてゐるぞ。着物をよござなように気をつけて行こう。それでは行つてきまーす。」

藤樹先生は、となりの村にでかけていきました。

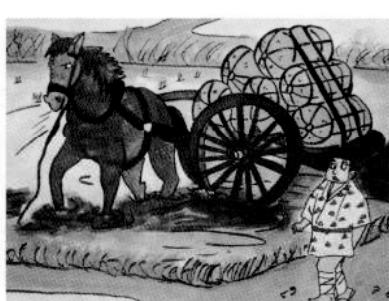
②おや、向こうの方から、荷車がやつてきました。

馬方 「このあたりは、道がぬかるんで歩きにくいな。おい、クリ公（馬の名）、氣をつけて行こうぜ。道のふちがやわらかくなつていてから、はまるなよ。おれも氣をつけけるからな。」

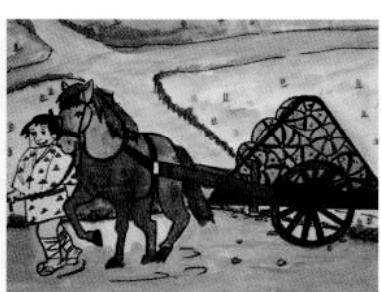
馬 「ヒヒーン、おやかた。どうしまふんばつて引け。」

馬 「ヒヒーン、ムムムー。がんばつているんだけど、荷車が重すぎて動きません。おやかた、いつしょに引っ張つてくださいよう。」

馬方 「よし、おれは、輪をかついでみよう。」

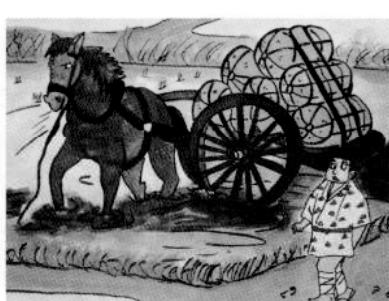


馬方は、馬のたづなを離して、荷車の輪のところへ行きました。



ていたのに、たいへんなことになりました。
③馬方 「おつとつとつ、荷車が傾いたぞ。」
荷車の輪が、を踏んでしまい、田んぼの中にはまつてしまつたのです。

荷車が傾いた。」



馬方は、馬のたづなを離して、荷車の輪のところへ行きました。

馬方が注意しながら、クリ公を引いた。氣をつけて行きますよ。」

④馬方（力をこめて）

「よいしょ、よいしょ、それ、どうだ。クリ公もがんばれ、よいしょしょ。よいしょ、よいしょ、それ、どうだ。」馬方は、荷車を押し上げながら、馬をはげました。

しかし、ますます田んぼにめりこんでいきます。

馬方「困つたなあ。どうしても輪が抜けないぞ。」

馬「ヒヒーン。おいらも力をいっぱい出したのに、動かないや。おやかた、どうすればいいんでしよう。」



馬方「しかたがないや。米俵を降ろして、荷車を軽くしようか。クリ公。あとで、もう一度たのむよ。」

馬「おやかた、たいへんだけど、がんばってくださいね。」

馬方「おやかた、せつかく、積んだのを降ろすのはいやですね。」

馬「こうなりや仕方がないよ。クリ公は、ふんばつているんだぞ。」

馬方が米俵をかついで降ろし、二俵目に手をかけたその時です。



⑤馬方「ああ、だめだ。動かない。だれか、手伝ってくれる人がいないかな。（大声で）だんな方、手伝つてください。お願ひします。」

村人1（隣にいる村人に向かって）「あんたは、力が強いだろう。手伝つてやりなよ。」

遠くから見ていました。
用事をすませた
藤樹先生が、田んぼ道にさしかかりました。

村人2「おれは、腰痛を起こしてな、痛くて手伝えないよ。お前がやれよ。」

村人1「おれは、えんりよする。た



くさん米俵を積んでいるから、重すぎるんだよ。おれはいやだね。なんだかんだと言ったら、村人たちはだれ一人、助けようと

する者はありません。

馬方「しかたがないや。米俵を降ろして、荷車を軽くしようか。クリ公。あとで、もう一度たのむよ。」

馬「おやかた、たいへんだけど、がんばつてくださいね。」

馬方「おやかた、せつかく、積んだのを降ろすのはいやですね。」

馬「こうなりや仕方がないよ。クリ公は、ふんばつているんだぞ。」

馬方が米俵をかついで降ろし、二俵目に手をかけたその時です。

遠くから見ていました。

⑥馬方「ああ、だめだ。動かない。だれか、手伝ってくれる人がいないかな。うーん。」

そんな様子を、村人たちが、

遠くから見ていました。

⑦藤

「おやつ、荷車が田んぼにはまっているな。」

藤樹先生「馬方さん。（大きな声で呼びかける）困つておいでのようですね。米俵を降ろすのは、たいへんでしょ

う。降ろさなくとも、私が荷車を押しますよ。」

馬方「どこのどなたさまかは存じませんが、その姿では、着物が汚れます。自分

で何とかやりますから。」

藤「力を合わせた方が、いいに決まります。汚れたものは洗え

ますよ。汚れただけで、遠慮はないに決まります。汚れたものは洗え

村人1「あつ、藤樹先生だ。あんないい着物のままで、田んぼへ入られたらぞ。」

村人2「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人3「それに、一人でも多い方がいいよな。」

村人達「みんなで手伝おうよ。」

村人4「みんなで手伝おうよ。」

村人5「みんなで手伝おうよ。」

村人6「みんなで手伝おうよ。」

村人7「みんなで手伝おうよ。」

村人8「みんなで手伝おうよ。」

村人9「みんなで手伝おうよ。」

村人10「みんなで手伝おうよ。」

村人11「みんなで手伝おうよ。」

村人12「みんなで手伝おうよ。」

村人13「みんなで手伝おうよ。」

村人14「みんなで手伝おうよ。」

村人15「みんなで手伝おうよ。」

村人16「みんなで手伝おうよ。」

村人17「みんなで手伝おうよ。」

村人18「みんなで手伝おうよ。」

物のままで、田んぼへ入ら

れたらぞ。」

村人19「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人20「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人21「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人22「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人23「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人24「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人25「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人26「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人27「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人28「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人29「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人30「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人31「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人32「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人33「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人34「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

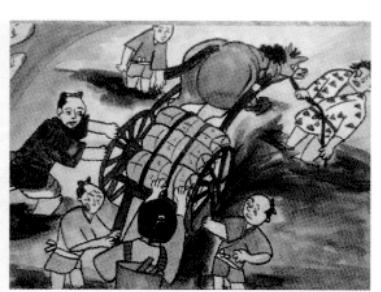
村人35「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

村人36「おれたちもほんやり

してては、ダメじゃないのか。」

4



みんな「ソーレ。どつこいしょ。」

馬方「はあ。ようやく上がつた。（大声で）よかつたあ。バンザイ。」

4

(11) 馬方は大喜びで、藤樹先生に、礼を言いました。

馬方 「だんなさま、ありがとうございます。だんなさまが手伝つてくれたので、こんなに早く荷車があげられました。この恩は、一生忘れません。ほんとうにありがとうございました。」



藤 「良かつた、良かつた。でも、決して私一人だけの力ではありません。村の皆さんのがいつしょになつて、力を貸してくれたのです。お陰です。(温かい声で) お

礼は皆さん言つてください。

馬方 「馬方さん、ごめんな。

馬方 「皆さんのが力を合わせて、助けてくださいからこそ、楽に荷車を上げることができました。うれしかつたです。」

村人2 「藤樹先生が、迷わず馬方を助けに行かれた時は、びっくりしたなあ。困っている人がいたら、すぐには、親切にしなくてはいけないことが、よく分かった。」



馬方 「はあ、藤樹先生といたすかたです。か。ほんとうに、親切で心のやさしいお方ですね。」

村人2 「藤樹先生が、迷わず馬方を助けに行かれた時は、びっくりしたなあ。困っている人がいたら、すぐには、親切にしなくてはいけないことが、よく分かった。」

※※※※※※※※※※※※※※※※

次回は、「馬方又左衛門」の紙芝居をご紹介します。お楽しみにしてください。



おしまい
こ、クリ公
もにこにこ
と、うれし
そうな顔で
別れまし
た。

「藤樹像を求めて」(3)

日野小学校の先生から、町内の西大路小学校の校庭にも藤樹先生の像があることをお聞きして、早速、その西大路小学校に行くことにしました。

そこは、ブルーメの丘のすぐ麓に位置する伝統ある学校でした。案内された校長室の本棚の目立つところに、『中江藤樹全集』が納めてあることに驚きました。校長先生に藤樹像が設置されましたが、経緯等をお聞きしましたが、詳しいことは分からぬとのことでした。



旧豊郷小学校校舎の藤樹像



西大路小学校の藤樹像

(12) 藤樹先生は、にこにこ笑いながら、足のどろを洗い、着物のどろをはらうと、何事もなかつたかのように、立ち去りました。

馬方 「皆さん、ありがとうございます。お陰で、荷車を引き上げることができます。」

村人1 「馬方さん、あの方がどうでした。あのだんなさまと皆さんの

馬方 「分かりました。気をつけてま

りります。」

村人1 「では、馬方さん、さようなら。」

馬方 「皆さん、さようなら。」

馬方はにこにこ、村人たちもにこにこ

その一ヶ月ほど後に、豊郷町立豊郷小学校へ行く機会があつたので、旧校舎にある藤樹像を訪ねました。ここのお先生は、大変威厳のある表情をされていました。

(三田村治夫)

※※※※※※※※※※※※※※※※

藤樹像は、西門（旧の正門）を入れた正面にありました。意外にもその藤樹先生は大変ふくよかで、親しみ深い表情をされていました。収穫のある日野町への旅でした。

寄稿 会員のひろば

藤樹先生と私

吉村 啓一

この会に参加させて頂いていることに感謝致しております。今、改めて感じていることはこの地では藤樹先生は過ぎ去つた方ではなく本当に現に多くの人たちの中に生き生きと暖かく生きていてその教え、思索の根幹、行つた事が長い時を置いてなお広く普遍的に拡散し収束しているらしいという事実です。感動を覚える毎日です。

あの十七世紀 元和偃武が宣せられ時代の大きい流れは恒久の平和を指向。武を捨て 文を競わせることに大きく政策転換していった。一方で大名家の取潰し 減俸 配置換え、法度は厳しく参勤交代の制も定まる。朱子学を奨励しそれを精神的支柱として細かく支配体制を築いていった。与右衛門、その父と祖父はまさにその時代を生きた。今少なからず父吉次の存在と処士への志向 与右衛門への教えに様々感銘を覚える。あの大きいスケールの教養人の結局は体制の犠牲となつた 須トが十二歳の与右衛門に大学や論語を講じたのか。あまりに凡夫 小生は少しでもその知に近づきたいと思ひ静かに小川村近辺を、大溝城とその近接する山々を歩いた。山陰米子に、また伊予大洲をも訪れ少し滞在してみ

た。肱川の畔をゆっくり歩いた。対岸の富士山（とみすやま）に登り伊予の山並を大洲城下を感慨深く見た。同時のフランスのデカルトの命題『われ思ふ。故に我あり』、シェイクスピアの劇作 ヨーロッパ・バロック美術をも藤樹先生はその中心的思惟の中で捉えていたのかかもしれない。現代のヤスペースは深く王陽明に同調する。学ぶことはあまりにも多しと思する日々である。

四十三年振りの大洲訪問

中村 仁

定年退職後、ロードバイクを始め全国各地を走るようになつた。今回は『足摺・四十万チヤレンジライド』（高知県四十万市を拠点に、二月二十八日に足摺岬周回の百三十五km、翌三月一日は四十万川を遡る百四十二kmのサイクリング大会）に参加・・・十九歳の夏、二週間かけての四国一周サイクリング以来の思い出の場所である。

さて、二日間の日程を終え、大洲の町を訪問したのは、十一月から藤樹記念館で受講していた「孝經読破講座」の所以である。講師の中江彰先生にこの事を相談したら、直ぐに森永茂大洲藤樹会事務局長（元大洲小学校長）による案内を手配をして戴けた。大洲の町も四十三年振り前回は、雨の朝、人気のない大洲城にある藤樹像の下で



大洲高校の垂れ幕・中村修二氏ノーベル賞受賞お祝いと「とうじゅゆの教えていじめを無くそう知行合一」



大洲小の校訓
「良知に生きる」碑

古城の趣はなくなつていて。藤樹像も、その際に天守閣跡地から見晴らしの良い場所に移転していたのもしかしたら、新旧の場所を知る数少ない高島人かと、一人悦に漫る。その後、臥龍園、おはなはん通りなど市内おすすめスポット+肱川上流を回つて帰途につく。

さて、二日間の日程を終え、大洲の町で『藤樹先生』が定着している様子に「もしかして高島市より大切にされ、深く慕われているのでは」と氣恥ずかしさすら覚えた。僅か3時間余りの訪問であつたが、日をあらためて、ゆっくり訪れたいと感じた大洲の町であった。

※三月二十三日『しまなみ縦走2015』参加の帰途、岡山の「閑谷学校」を訪問。見慣れた「藤樹画像」・「致良知」と出会うことが出来たのも、その二日前の『孝經読破講座』の最終講義での中江先生のお話からであることを付記する（感謝）。



大洲城の中江藤樹像
手前は、生誕400年記念『孝』碑

良知を磨き、愛敬の心と高い志を育む教育をめざして

前安曇小学校長 高木 淳

豊かな心と自ら学び考える意欲をもち、心身ともにたくましい安曇っ子の育成

安曇小学校の子どもたちが明るく素直で、人の話をしっかりと聞き、挨拶もできるようになりつつある。

上記の学校教育目標をもとに藤樹先生の教えに学び、よりよく生きようとしてきた。

一、学力の向上をめざす

研究主題「『ことば化』する学び」を設定して子

どもたちが自分の思い・気づきを自分のことばで表現する場を大事にし、全教員が全教科・領域を対象に、年間二回の研究授業を実施して思考力・表現力の向上をめざしてきた。安曇小学校の特色であるリバーウォッチング活動（生活科・総合的な学習）においても教科学習による積み上げを生かして学び合い、教科活動を展開している。子どもたち同士が互いのよさを生かして学び合い、切磋琢磨することで良知を磨くことができればと取り組んでいる。その成果を一月の安曇っ子博物館で保護者や地域に公開をしている。また、「安曇小家庭学習の手引き」を活用できるよう

に家庭学習カードを用いて家庭学習強化週間を設定し、学力の向上に努めている。

二、豊かな心、愛敬の心を養う

安曇小学校では、藤樹先生に学ぶ機会の一つとして、道徳においても各学年、年間計画に位置づけ、愛敬の教えに基づく心の教育、生き方の教育を展開している。また、

図書室には、藤樹先生のコーナーを設けて、教えに親しみるよう配慮をしている。

毎月、人権の日を設定して、人権担当教員が全校放送で詩を朗読し、子どもたちに思ひやりの心や差別を許さない心を育みたいと取組を進めている。詩の朗読のあとには、聞いた感想を担任が子どもたちから引き出すなどして人権感覚を磨いている。人権週間ににおける集会では各クラスの代表の子どもたちが人権学習の感想を述べるとともに、校長講話で、AINシャタインが来日したときに感銘を受けた「姥捨て山」の母のことを最後まで心配する摂取不捨の心、思ひやりの大切さを訴えた。

思いやりの心を育むという観点では、福祉体験学習の充実にも努めている。聴覚、視覚障害、肢体不自由の方

シリーズ⑤ 「伝え継ぐ藤樹先生」



トイレのスリッパそろえ

を招いて、体験を通して学習ができる機会を設け、自分の生き方を見直し、相手の立場に立つて物事を考えることの大切さを学んでいる。

三、知行合一、たくましさを養う

平成二十六年度は児童会運営委員が考え出した「みんなが仲良く笑顔で助け合える学校」のテーマのもと、あいさつ運動や困り事アンケートに基づく

「仲良くしよう呼びかけ隊」による啓発や「廊下歩行」「靴そろえ、トイレのスリッパそろえ」等運営委員自らが率先して行動し、全校児童に浸透するように訴えた。あいさつにしても靴そろえにしても、よいことをしようと思っているうちは、本物ではない。自分から進んで行なうこと気が持ちよくなり、よいことをしようと思うまでもなく行動できこそ「知行合一」ということが言えると集会毎に訴えてきた。

平成二十五年度「高島掃除に学ぶ会つどい」には、卒業を前にした六年生も参加し、トイレ掃除の大切さと一生



ピアノトリオの伴奏で校歌を歌う

懸命に努力することの素晴らしさを感じもらつた。

四、豊かな情操と高い志を育む

（文化庁主催）でピアノトリオを迎えて、演奏を中心とした授業を展開している。この事業は、三年生と五年生が、体育館やホールではなく、身近に楽器等に触れることと

のできる音楽室で、ヴァイオリンを弾く体験をしたり、トリオの息づかいや表情を間近に感じ取つたりと、音楽のよさや素晴らしいを体感している。授業の最後には、ピアノトリオが音楽家をめざして描いてきた夢についても語つてもらい、自分の夢を大きく描き、努力することの大切さを訴えてもらつた。授業後の子どもたちの感想にも、「私の夢は医者です。ブリマヴエーラの皆さんのようにがんばります。」「ぼくは作曲家になりたいです。」このように、子どもたちが、優れた本物の芸術に触れることにより、豊かな情操を養うとともに、「志を育む教育」の推進ができると考えている。

藤樹記念館通信②

江戸の陽明学へ

藤樹から松陰へ

中江藤樹記念館

横井 正

今回は「致良知」「心即理」「知行合

一」「天地万物一体の仁」といった思想を積極的に取り入れた代表的な人物を陽明学者として時系列的に紹介します。



藤樹先生肖像画

先ず「日本陽明学の祖」ならびに「近江聖人」と称された中江藤樹（一六〇八～四八）が挙げられます。

藤樹は、最初聖人になるという目的のために

朱子学を独学自修しましたが、課題を突き詰めていくうちに陽明学に出会い、それに共感していきました。

次に、藤樹の門人であつた熊沢蕃山（一六一九～九一）が挙げられます。門人として約八ヶ月間藤樹に学んだ蕃山は、師を尊敬しながらも絶対視するのではなく、備前岡山藩で池田光政に仕え、「良知良能」説により、庶民のための藩政に尽力しました。

その後幕府が朱子学を官学としました。しかし、三輪執斎（一六六九～一七四四）が「標註伝習録」を刊行し、陽明学の普及に努めました。執斎



吉田松陰肖像画

このように整理してみると、藤樹が「日本陽明学の祖」といわれる所以を理解していただけます。

只今、記念館では、各々の人物に纏

は、一七二四年と一七四〇年に藤樹書院に参詣しています。

続いて、一八二一年、佐藤一斎（一七七二～一八五九）が、藤樹書院

を訪れ、藤樹を敬慕する賛を残しています。一斎は、昌平黽の儒官でしたので、表向きは朱子学を奉じつつ実は陽明学を唱え、佐久間象山（一八一一～六四）・横井小南（一八〇九～六九）・山田方谷（一八〇五～一八七七）などを輩出しています。

そして、一八三二年に藤樹書院を訪れた大塩平八郎（一七九三～一八三七）は、一八三三年に「大學」、一八三四四年には「孝經」を講じました。一八三七年に大塩の起こした乱は、「大學」の「在親民」を「民を親しむ」と解した王陽明の影響を受けていたのではないかと思われます。

明治維新前になると、佐久間象山の門人の吉田松陰（一八三〇～一八五九）は、松下村塾を開き、思想と実践の基盤として陽明学を講じたようです。松陰も「翁問答」を精読していま

わる資料を展示し、江戸時代の陽明学の変遷を検証していただきたいと思います。小企画展を開催しています。

（九月三十日まで）

総会のお知らせ

日時 六月十九日（金）十九時三十分より

場所 安曇川公民館

▼引き続き、小講演会

演題 「藤樹先生と私」

講師 德丸和枝氏（当会理事）

賛助会員一覧

○ソエダ株式会社 安曇川町五番領
○株式会社 中村測量設計 野洲市小篠原

○ウエストレイクホテル可以登樓
○株式会社 大山建設

○株式会社 桑原組

○有限会社 宏和商事

○有限公司 白浜荘

○社会福祉法人 新旭みのり会
○株式会社 TADOCO-POLY-SHION

○鉄屋商事株式会社

○とも栄 藤樹街道本店

○中村印刷株式会社

○有限会社 馬場塗装

○三田村印刷株式会社
○有限公司 綿庄食品会社

（五十音順）

あとがき 薄れゆく？「孝」

「私の心を慰めてくれる子は誰もいなかつたです。『そんなことやつてから詐欺に遭うねん』と、長男に言われたことはグサリときましたね。」

（振り込め詐欺に遭つた八十代の女性）

これは、二月十九日放映のNHK

クローズアップ現代『詐欺被害者閉ざされた苦悩』で紹介された一コマです。詐欺の被害に遭つた老父母には、自分を責める人が少くない」とのことです。さらに、「（詐欺の話を）言うと息子も怒るもん、『言わんといってくれ』『聞きたくない』。本人はつらい、本当につらい」と孤立感を深めていく。そして、被害者の中には、自ら命を絶つた人がいたこともあります。分かつてきたり。この詐欺、誠に許し難い犯罪です。

高齢化、少子化、過疎化、核家族化、それに経済的格差といった社会の急激な変化が、家族や親子の間には壁や溝を作つてゐるようと思えます。親の子に対する募る「愛」と、子の親に対する薄れゆく「孝」の「スキ」を狙つたようなオレオレ詐欺。老人の孤独死やこうした詐欺の被害を防ぐためにも、「孝」を学び、「絆」を深めたいものです。

（H・M）